
ゲーマーと歴史バカと無限神刀流

新夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゲーマーと歴史バカと無限神刀流

【Nコード】

N5005X

【作者名】

新夜

【あらすじ】

2年Fクラス代表、吉井明久。

『観察処分者』『無限神刀流居合術部長』等の肩書きを持つ彼は…生粋のゲーマーで、歴史バカで…フラグ王だった。

クラスの女子全員（三（四？）人だけだけど）の愛と、男子の殺気（笑）等を背負い、明久は刀を抜き、振るう。

その向こうにある、Aクラスという栄光を目指して…

注）当分は『天才と色ボケと下克

上』の更新を優先したいので、こちらの更新は超不定期です。

後作者にとっては初のFF8関係無しな小説です。

キャラクター設定（前書き）

問

調理の為に火をかける鍋を制作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。

この時の問題点と、マグネシウムの代わりに用いられるべき金属合金の例を一つ上げなさい。

姫路瑞希の答え

『問題点…マグネシウムは火にかけると激しく反応する為危険であるという点』

合金…ステンレス』

教師のコメント

正解です。合金なので鉄ではダメと言う引っかけ問題なのですが、姫路さんは引っかけありませんでしたね。

土屋康太の答え

『問題点…ガス代を払っていなかった事』

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

島田美波の答え

『問題点…調理するべき食べ物が無かった事』

教師のコメント

そこも問題じゃありません。

清水美春の答え

『合金…玉鋼』

鉄と炭素の合金ですので一応正解としますが、鍋では無く日本刀に

使う物です。

木下秀吉の答え

『合金：ヒヒイロカネ』

吉井明久の答え

『合金：オリハルコン』

教師のコメント

あつたらニュース物です。

キャラクター設定

無限神刀流居合術部

明久が入学と同時に創立した運動部。

読んで字の如く、無限神刀流居合術の稽古・実技を主な活動としている。

部長は明久、副部長は美波、社会科担当の武田先生が顧問を務める。創立当初は同好会扱いだったが、二年進級の時点で部員が五名いた為、部に昇格した。

吉井明久

CV：下野紘

クラス：2年Fクラス代表

得意科目：日本史・世界史・倫理・家庭科（400点台中盤）

苦手科目：それ以外（40点近く）

総合科目Aは1300点前後、総合科目Bは2300点台序盤

召喚獣：基本的に原作と同じだが、武器が刀（居合）に変わっている（近距離型）。

性格：原作と比べて自らへの想いに少し鋭く（瑞希、美波、美春の想いに気付いている）幾分冷静な部分もあるが、本質は同じ。

備考：今作の主人公（原作でも主人公）。

ゲーム好きが高じて、原作とは違い歴史系科目と倫理（あと家庭科）が学年トップクラスの点数を叩き出せる様になり、それによってFクラスの代表となる。

一年の頃に『無限神刀流居合術同好会』を立ち上げて代表になり、二年になり部へ昇格した時にもそのまま部長に。

島田美波

CV：水橋かおり

クラス：2年Fクラス副代表

得意科目：図形数学・論理数学・日本史・世界史・倫理・家庭科（図形数学・論理数学・日本史は200点近く、それ以外は300点近く）

苦手科目：古典（一桁）

それ以外の科目は60点近く、総合科目Aは1300点近く、総合科目Bは2000点台中盤

召喚獣：原作と同じ（近距離型）。

性格：原作と比べて明久への想いに素直になっているものの、照れ隠しの暴力は相変わらず（自分の言動で恥ずかしくなり「言わずなバカ！」と言いながら殴り飛ばすのが主なパターン）。

備考：今作のヒロイン候補（原作でもヒロイン候補）。

明久の指導によって、原作とは違い日本史・世界史・倫理・家庭科がAクラス並になり、それによりFクラスの副代表となる。

姫路瑞希

CV：原田ひとみ

クラス：2年Fクラス

得意科目：数学（500点近く）

苦手科目：物理（300点台序盤）

それ以外の科目は400点台中盤、総合科目Aは5600点台中盤、

総合科目Bは7900点前後

召喚獣：原作と同じ（近距離型）。

腕輪：熱線

原作と同じ。

性格：基本的に原作と同じだが、明久へのアプローチはより積極的になっており、またヤンデレ要素も大分薄い。

備考：今作のヒロイン候補（原作でもヒロイン候補）。

清水美春

CV：竹達彩奈

クラス：2年Fクラス

得意科目：日本史・世界史・倫理・家庭科（200点台後半）

それ以外の科目は100点台前半、総合科目Aは2000点前後、

総合科目Bは2900点台前半

召喚獣：基本的に原作と同じだが、武器がシャムシールに変わっている（近距離型）。

性格：原作と比べて好みの人物のストライクゾーンが広く（女性的なら有り）、美波だけでなく明久（お兄様と呼んでいる）にも惚れている。

備考：今作のヒロイン候補。

明久の指導によって、日本史・世界史・倫理・家庭科がAクラス並総合科目でCクラス並になるも、クラス振り分け試験での教師の瑞希への対応に腹を立てて途中退室、結果Fクラス行きとなる。

木下秀吉

CV：加藤英美里

クラス：2年Fクラス

得意科目：現代国語・古典・日本史・世界史・音楽・美術・倫理・家庭科（現代国語・古典・音楽・美術は100点台前半、それ以外は200点前後）

苦手科目：それ以外（60点前後）

総合科目Aは1200点近く、総合科目Bは1900点前後

召喚獣：原作の二学期からの服装、武器（近距離型）。

性格：原作と同じ。

備考：今作のヒロイン候補（？）。

一年の頃の或る時、演劇で居合を披露する事となったのが切っ掛けで無限神刀流居合術同好会に掛け持ちで入会し、部への昇格の立役者となる。

同時に明久の指導で日本史・世界史・倫理・家庭科がAクラス並に、それに引っ張られる形で現代国語・古典・音楽・美術がDクラス並

になる。

武田剣悟

年齢：28歳

CVイメージ：安元洋貴

クラス：2年Fクラス担任

得意科目：日本史・世界史・保健体育・倫理（保健体育のみ700点前後、それ以外は900点台前半）

それ以外の科目は500点前後、総合科目Aは7300点台中盤、

総合科目Bは10000点前後

召喚獣：黒い着流しを身に纏い、左腰に太刀（居合）を帯びている（近距離型）。

性格：一見クールで何事にも動じない様に見える為、近寄り難い雰囲気纏わせているが、面倒見が良く所謂『褒めて伸ばすタイプ』。

備考：2年Fクラス担任。

明久が無限神刀流居合術同好会を創立する際、段位を持っていた事から顧問就任を要請され、快諾。

明久の事は、年の離れた弟の様に接している。

キャラクター設定（後書き）

試験科目について

今作では、現代国語・古典・図形数学・論理数学・日本史・世界史・現代社会・地理・物理・科学・生物・天文学・英語の13の主科目と、保健体育・音楽・美術・倫理・家庭科の5の副科目、合計18科目が試験科目となっている。

また、13の主科目の合計を競う総合科目A、副科目も含めた18の科目の合計を競う総合科目Bも、試召戦争での指定科目となっている。

クラス振り分け試験では、総合科目Aの成績で順位が決まる。

一章 巨乳と虚乳と何時もの朝(前書き)

問

以下の意味を持つことわざを答えなさい。

- (1) 得意な事でも失敗してしまう事
- (2) 悪い事があった上に、更に悪い事が起きる例え

姫路瑞希の答え

- 『(1) 弘法も筆の誤り
 - (2) 泣きつ面に蜂』
- 清水美春の答え

- 『(1) 河童の川流れ
 - (2) 踏んだり蹴ったり』
- 木下秀吉の答え

- 『(1) 猿も木から落ちる
 - (2) 弱り目に祟り目』
- 教師のコメント

正解です。流石ですね皆さん。

土屋康太の答え

- 『(1) 弘法の川流れ』
- 教師のコメント
- シユールな光景ですね。

島田美波の答え

- 『(1) 呂布もマミる
 - (2) 泣きつ面蹴ったり』
- 教師のコメント

貴方は鬼ですか。

吉井明久の答え

『(1) 村正の刃零れ

(2) 泣きつ面に刃先』

教師のコメント

貴方は悪魔ですか。

一章 巨乳と虚乳と何時もの朝

僕達がここ、文月学園に入学してから二度目の春を迎えた。校舎へと続く坂道には、豪華絢爛と表現出来る程に桜並木が咲き誇っていた。

まるで、ここに入学する新しい生徒を盛大に出迎える様に。そして、これから戦乱に足を踏み入れるであろう、

ムニユ

「わぁ…桜が綺麗ですね、明久君」

グイッ

「そうね瑞希、朝早くから来た甲斐があったわね。ね、アキ？」

だきっ

「本当ですわ、お姉様方。これが汚わらしい豚共がいるとなるとそれは行きませんわねえ、お兄様」

僕達をも…

「確かにそうだねっていうか、皆近い！くっつき過ぎて歩みにくから！」

「ダメ…ですか…？」

「良いじゃない、アキとウチの仲でしょ」

「美春はお兄様分が足りないと餓死してしまうのです…！」

いやダメとかそういう問題じゃ無くて、遅くなるかも知れないし、それに…

「何か柔らかい物が当たって…」

「」「」当てるのよ（）るんです（）るのですわ（）」「」

「待つて！三人揃って僕を誘惑してどうするつもり！？僕だって男なんだけど！」

「明久君なら…」

「お兄様なら…」

「アキなら…って言わすなバカ！」

ドカツ！

「あべしい！」

毎回思うけど、何で自爆する度に殴られなきゃならない訳…まあそこも美波の可愛い所なんだけどね。

まあそんなこんなで校門まで辿り着くと、

「おはよう四人とも、相変わらず仲が良い事だな」

そこには筋骨隆々と言う言葉が似合う横綱がいた。

「」「」おはようございます、西村先生「」「」

「横綱、おはようございます」

「俺は西村だ、吉井！」

パーン！

瞬間、右頬に物凄い衝撃が襲ってきた。
これは…

「横綱、格別な張り手でした」

「ハッ！？俺は一体何を！？」

目前に居るのは、横綱西村宗一関。

雄二達からは、趣味がトリアスロンで年中半袖にちなんで「鉄人」とか呼んでいるけど、馴々しいと思う。

だってここの教師にして横綱だよ？

それ相応の敬意と言う物を示すべきだ。

「まあいい、ほら、受け取れ」

そう言うと横綱は側に置かれた箱から四通の封筒を取出し、僕達へと差し出した。

「それにしても横綱、何故にこのような面倒な方法を取っているのでしょうか？普通に掲示板に張り出すとかはしないのですか？増してや横綱にこの様な仕事を押しつける等…」

「確かにお兄様の言うとおりですわね」

「そうね」

「そうですね」

「吉井、敬意はいいからそろそろ横綱と呼ぶのを止める。最近仕事が出来たみたいになってかなわない。まあそれはいいとして、普通ならそうするのだが、うちは世界的にも注目されているシステムを導入した試験校だからな。このやり方もその一環という訳だ」

「成る程、そういう事でしたか」

横づ：ゲフンゲフン、西村先生のありがたい説明に納得しつつ、封筒を開けようとするよ、

「それにしても姫路は残念だったな。お前ならAクラス入りは確実だったのに」

「いえ、体調管理が出来なかった私の責任ですから」

「それに清水はその対応に腹を立てて途中退室したそうじゃないか。あの後それが問題になって職員会議が開かれたんだ。その場で俺達は再試験を受けさせるべきだと進言したんだが、学園長が「規則は規則」と首を縦に振ってくれなくてな。済まない」

「お気持ちだけで十分ですわ。それにあんな豚野郎のいる状態で試験を受け続けるより、Fに行った方がマシですわ」

「…何か引つ掛かる言動はあるが、それでもお前のした事は人間として間違っていないと俺は思う。胸を張っていいぞ」

と、途中退室で無得点となってしまった二人に声を掛けていた。

そう、途中退室や無受験は理由の如何に関わらず無得点扱いになる。特にその時の成績で所属クラスの決まる振り分け試験では、それすなわち最底辺のFクラス行きを意味する。

あの時は僕も怒って瑞希を連れて退室しようと考えたけど、その時僕を止め、瑞希を連れて行ったのが美春だった。

でも正直、あの時一緒に退室すれば良かったと半分後悔している。何故なら、

「吉井。今だから言うがな？」

「はい、何でしょうか横綱？」

「だから西村だ！…まあいい、お前が入学してから「吉井明久はバカなんじゃないか？」と俺はずっと思っていたんだ」

「横綱ともあろう御方が何故その様な…しっかりして下さい。三国

志の知将である呂蒙子明も「士、別れて三日、即ちさらに刮目して
あい待す」と言ってますよ。実際、主科目である日本史と世界史は
出来ていたんですから」

横綱と言えども今の言葉は聞き捨てならない。

実際、屈指の難しさと言える文月学園の試験を、日本史と世界史は
400点を軽く突破する位出来たと自負しているし、他の科目だつ
て十問に一問は出来たと思っっている。

AやB、それにCクラスは無理だとしても、DやEには行けると思
う。

…まあそれが、あの時一緒に退室すれば良かったと後悔する理由で
もあるんだけどね。

「確かその言葉、別れて数日と経ったら、次に会うときはよく目を
こすって見直せという意味だったか…耳が痛くなる諫言をありがと
うな。喜べ吉井、お前への疑いは無くなった」

「分かってもらえて何よりです」

「ああ、吉井。お前はバカじゃない」

封筒を切り開き、中の紙を取り出すとそこには、

吉井明久 貴殿をFクラス代表に任ずる

「お前は日本史と世界史と倫理と家庭科以外は相当な大バカだ」

何でこうなった、と思ったのも一瞬、

「まいつか、瑞希も美春も一緒だし」

「…これを機に苦手を克服するという考えはないのかお前は」

「あれ？アキもFクラスなの？やった！」

「え？という事は美波も！？」

「そうよ！ほら！」

と、美波が差し出した紙には、

島田美波 Fクラス

と、書かれていた。

こうして、僕達四人の、最底辺の学園生活が幕を開けた。

一章 巨乳と虚乳と何時もの朝（後書き）

今作では明久は西村先生の事を『鉄人』では無く『横綱』と呼んでいます。これは西村先生の中の人（大塚明夫さんです）がかつて某相撲アニメの横綱の声を担当していた事に因んだ中の人ネタです（笑）

ちなみに明久は指摘されても『横綱』と呼んでいます。彼は彼なりに敬意を示しています（笑）

二章 宮殿と廃墟と決意の朝（前書き）

問

以下の英文を訳しなさい。

『This is the bookshelf that my grandmother used regularly』

姫路瑞希、清水美春の答え

『これは私の祖母が愛用していた本棚です』

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。

島田美波、木下秀吉の答え

『これは私の祖母が使っていたブックカバーです』

教師のコメント

bookshelf「ブックカバー」ではありません。

吉井明久の答え

『それは原初の本棚アカシックレコードです』

教師のコメント

恐らくgrandmotherを何かの始まりという解釈で答えたのでしょうか…

土屋康太の答え

『これは』

教師のコメント

訳せたのはThisだけですか。

二章 宮殿と廃墟と決意の朝

「何だろう、このバカでかい教室は…」

「普通の五倍は超えてそうですね…」

「こんなに広くしても無駄スペースが出来るだけでしょ」

「扉一枚隔てた格差が向こうにありますわ」

僕達がFクラスへ向かう途中、ふと目に入ったのはAクラスの広い教室。

物凄く早く登校したので人っ子一人居なかったけれど、それがこの異様な広さをより感じさせた。

それだけじゃない。

「何あれ！？席ごとに個室になってるの!？」

「それに冷蔵庫に個人用エアコン、果てはノートパソコンまであるんですか!？」

「さらに椅子はリクライニングだよ!？」

「おまけに黒板は最新式の電子黒板に天井ガラス張り…扉一枚隔てた格差が向こうに(r y)」

その設備の豪華さに、僕達四人は驚きを口にする。

これ本当に学校の教室なのかな…高級ホテルのロビーって言われても違和感無いと思う。

…っといけない、何時までもここには未練が募るばかりだ。

「三人共、そろそろ行くこうか」

「はい」

「ええ」

「そうね」

後ろ髪引かれる思いだったけれど、僕達はFクラスへと向かうべく、その場を後にした。

そして数分経って、僕達はFクラスに到着した…訳何だけれども、

「ねえアキ、瑞希、美春、ウチら山奥に来ちゃったのかな？」

「美波ちゃん…現実逃避しても状況は変わりませんよ…」

「何だろう、このボロっちい設備…」

「扉一枚隔てた格差が（ry」

何ていうか、その…

これはひどい

机の代わりであろう卓袱台は足が折れている物もあるし、椅子の代わりであろう座布団は煎餅を通り越して綿入ってるのか怪しい。

畳も所々傷んでいる（一部腐敗までしている）し、黒板は大分古ぼけていてヒビまで入っている。

挙げ句たてつけが悪いのか隙間風も感じられ、そして角には蜘蛛の巣…

Aクラスとは真逆の意味で学校の教室なのかな…

「と、とりあえず中に入ろうよ。突っ立ってても何も始まらないよ。臥薪嘗胆で有名な呉王夫差も、自ら薪の上で寝る事で打倒越国の思いを再確認したんだしさ」

「そうですね。それに中は幾分マシですよ、外よりは」

「そうですね、酷いのは外面だけですわ」

「そうね、腐っても鯛、じゃないけど学校の教室だしね」

そう口々に言い、Fクラスの扉を開けると、

「おお、明久達ではないか。早かったのう」

僕の親友にして同じ部活の仲間である木下秀吉が迎えてくれた。

演劇部と掛け持ちで所属している、年寄り臭い口調が特徴的な所謂ロリババアだ。

本人は男と言い張っているけど、その可愛らしい顔立ちとセミロングのストレートヘア、170cm足らずで華奢な体軀は正に美少女余りに男と言ひ張り、仕舞には男子の制服を着ている為に周囲からは「第三の性別『秀吉』」と言われたりする。

只、部活で実技を披露する時のあの女つ気を感じさせない凄みのある太刀捌きは、男だと言ひ張る程の物はある…でも、だからって性別を偽らなくても…

「む、何やら聞き捨てならぬ言葉が聞こえたが？」

「き、気のせいだよ。ともかく、おはよう、秀吉」

「おはようございます、木下君」

「おはようございますわ、木下さん」

「おはよう木下、随分早いわね。もしかして演劇部の？」

「うむ。来週の新生歓迎会でちょっとした演目を披露する事になったの、その練習があるのじゃ」

ありゃりゃ、演劇部では来週に向けて練習があるのか。

流石に合間を縫って休みが入ったりはしないよね…寂しいな。

「そっか。演劇部の方も頑張ってるね」

「こちらの方は私たちに任せて、演劇に全力で励んで下さいまし！」

「頑張ってきて下さいね、木下君」

「たまにはこっちにも顔出しなさいよ」

「うむ！では行ってくるのじゃ」

そう言つて演劇部の朝練へ向かう秀吉を僕達は見送つた。

さて、Fクラスの教室はどうなっているか…つて、

「外見通りの酷さだったね…」

「あ、あはは…けほっけほっ！」

「瑞希大丈夫!？」

「は、はい…」

「何だか埃っぽいわね。それに黴の臭いが…」

「扉一枚隔てた（ry）」

うん、覚悟が甘かった。

入つた瞬間に鼻についたのは、微妙に黴臭い空気の臭い、そして埃っぽさ。

余りの惨状に瑞希は咳き込んでいるし、美春は壊れ出したのと同じ台詞しか出ないし…

だけど、それだけでは終わらなかった…別の意味で（笑）

数十分後。

ガラッ

「ういーっす」

「早く（座りなよ）（座りなさい）、この（蛆虫）（豚）野郎」

…50人目がこいつかよ、先が思いやられる。

ホームルーム開始ギリギリにやってきたのは坂本雄二。
180cm台はある長身、ゴリラみたいな顔と体躯が特徴的な僕の悪友だった。

：十中八九、こいつも純粹な実力でFクラスに来たのだろう、小学生の頃に『神童』と呼ばれた知性は何処にいったんだが。

ピキッ

「聞こえてなかったのかい（ですか）？ん？」

チャッ

入る気無しと判断した僕と美春は、帯びている居合刀を何時でも抜刀出来るよう構える。

無論、目の前の不良をノす為に。

「…明久に清水、何してんだお前ら？」

その気配にやっと入る気になったか、僕達の姿を見るや、そんな事を聞いてきた。

「うん、先生がいなくて暇だったから教壇にね」

「私はお兄様の付き添いですわ」

「それって、何か意味あるのか？」

意味？そんなの決まってるじゃないか。

「Fクラスの代表になった訳だし、皆の顔を覚えておかないとね」
「な、何い！？お前がこのクラスの代表だと！？」

…失礼な、僕がFクラスとはいえ代表になったらおかしいのかい？

「何てこった…俺が、こんな歴史バカ何かに負けるとは…」

…ますます失礼だね、そもそも勉強のべの字もしてなさそうな雄二には言われたくないね。

僕だって平日頃から予習・復習をしてきたんだから…歴史と倫理だけ（笑）

ともかく、これでFクラスメンバー全員揃った訳だけれども…

女子4人（秀吉？含むに決まってるでしょ）に対し男子46人（僕も）。

何この男女比率の異常さは？

教室は見ての通りの有様、所属する生徒は正直言ってバカばかり…断言したい、勉強する環境じゃないとね。

というか日常生活送る上でも間違えてると思う。

身体の弱い瑞希なら数日と経たずに体調を崩しちゃうし、生理的に男を受け付けない（僕は除く。秀吉？何言ってるの？女じゃないか）美春も数日で不登校になりかねない。

クラス代表として、何とかしないと…二年になったし、仕掛けてみるかな。

試召戦争を。

余談だけど、

「所で明久、さっきのは俺に喧嘩売ってるのか？なら買って（ry
チヤキイツ！

「ん？何か言ったかな雄二？」

「何やら聞き捨てならない言葉をお兄様に吐きましたわね、この豚
野郎」

「その握り拳は一体何の為に使う気ですか、坂本君？」

「ウチのとアキのと美春のと瑞希の刀、どれでマミらりたい？選ん
でいいわよ坂本」

「お、俺が悪かったからその刀をしまってくださいお前ら！」

さっきのが余程腹立たしかったのか、雄二が僕に飛び掛かろうとしたので、僕と美春、さらには何時の間にか控えていた瑞希と美波で四方から首に刀を瞬時に突き付けてやったらおとなしくなった。身の程知らずめ（笑）。

三章 師匠と自己紹介と所信表明（前書き）

問

以下の問いに答えなさい。

(1) $4 \sin X + 3 \cos 3X = 2$ の方程式を満たし、かつ第一事象に存在する X の値を一つ答えなさい。

(2) $\sin(A + B)$ と等しい式を示すのは次のどれか選びなさい。

1、 $\sin A \div \cos B$

2、 $\sin A - \cos B$

3、 $\sin A \cos B$

4、 $\sin A \cos B \div \cos A \sin B$

姫路瑞希、清水美春、島田美波の答え

『(1) $X = \frac{\pi}{6}$ 』

(2) 『4』

教師のコメント

角度を『 $\pi/6$ 』では無く『 $\frac{\pi}{6}$ 』で書いてありますし、正解です。

土屋康太の答え

『(1) $X = \frac{\pi}{3}$ 』

教師のコメント

およそを付けてごまかしたい気持ちも分かりますが、これでは回答に近くても点数はあげられません。

木下秀吉の答え

『(1) 多過ぎて書き切れません』

教師のコメント

一つと指定した筈です。

吉井明久の答え

『(2)平均2.5』

教師のコメント

先生は今まで沢山の生徒を見てきましたが、選択問題でこの様な回答をしたのは君が初めてです。

三章 師匠と自己紹介と所信表明

キーンコーンカーンコーン

ガラッ

「LHRを始めるから早く席につきな、お前達」

チャイムが鳴ると同時に開かれる扉。

そこから入ってきたのは、僕達『無限神刀流居合術部』で最も関わりのある先生の姿。

「……武田先生、お早ようございます」「」

「師匠、お早ようございます。師匠がFクラスの担任ですか」

「ああ、明久か。お前がFクラスの代表になったそうだな。宜しく頼むな」

「はい」

師匠の言葉と共に、僕達は教壇を離れ、各自の席に着く。

……まさか師匠がFクラスの担任になったとはね。身近に良き理解者がいるというのは心強いね。

「それではLHRを始める。俺がお前達Fクラスの担任になった、自己紹介を始めた師匠、黒板に振り向いてチョークを取ろうとするが、」

「……武田剣悟だ。担当は社会科だ。宜しく頼むな」

何故か何もせずはこちらを向き直って続けた。
もしかして、

「師匠：もしかしてチヨークすら無いのですか？」
「その通りだ、明久：申請が遅れてしまった様でな：まあ、明日になれば届くだろう」

…いや師匠、申請とか関係無しにチヨークは常備されてる物では？
そう考えたけど、それを言うのは躊躇った。

…そうだ、ここFクラスだっけ。

「それはともかくだ、卓袱台や座布団等、個人の設備はしっかり行き届いているか？不備があったら今すぐ申請する様に」

…師匠、普通なら申請が殺到しますよ、この設備だと。
そう思った僕だけど、申請しても却下されそうだ、ここFクラスだし（笑

「先生、座布団に綿が入っていないんですけど」
「それは我慢してくれ」

「先生、俺の卓袱台の足が一本折れているんですけど」
「分かった。木工用ボンドを申請しよう」

「先生、隙間風が入ってきて寒いんですけど」
「ビニール袋とセロハンテープを後で申請しておくからな。他には無いかな？なら他は自分で持ってくる様にな」

…うん、予想通りの回答だったよ。

級友達の不備申し立て、というかほぼ不満が大挙したけど、ほぼ全て応急処置的なレベルの対応だった。

師匠、大変だな…

「それでは木下、お前の列から順番に回る様に自己紹介してくれ」
心の中で師匠を労っていると同時に、その師匠の呼び掛けで自己紹介が始まった。
最初は秀吉か。

「木下秀吉じゃ。演劇部と無限神刀流居合術部に所属しておる。先に言つて置くがワシは男じゃ。間違えぬ様にな」

相変わらず何言つてんのさ秀吉。
そんな可愛くも凜々しい顔してこのむさい46人と同じカテゴリに入る訳無いじゃないか。

「…土屋康太」

続いて自己紹介したのは土屋康太。
僕は彼の二つ名『ムツツリーニ』と呼んでいるけど詳細は後でね。
…それにしても何時も通りというか何と云うか、素っ気ないね。

それから数十人位の自己紹介を経て、右斜め前の美波の番になった。

「島田美波です。帰国子女ですけど日本語は会話する分には問題ありません。ですがドイツ帰りなので英語は苦手です。趣味は、」
そう言つて何故か一呼吸置く、その顔はほんのり赤みを帯びていた。
まさか…

「吉井明久をホールドする事です（照）」

ブシャアアアアアアアア!

ちよっ、美波!?

突然何なのそのカミングアウトは!?

自分の愛を知らしめたい気持ちは嬉しいけど、何でまた!?
何か向こうでムツツリーニが鼻血吹き出しちゃってるし!

「吉井を殺「何か言った?(ドカツ!」「ひでぶっ!?!」

『す、須川あああああ!?!』

何か誰かが殺気立ってるみたいだし!

まあノシてやったけどね(笑

皆の反応を見るとどうやら須川君だったみたいだ。

彼はカルト教団風組織『FFF団』の代表だからね、警戒しておかないと。

そんな喧騒を経て、次は美春の番だ。

…大丈夫かな、このむさ苦しい男子ばかりの集団の中で。

「清水美春です。お兄様やお姉様との恋路を邪魔するならノシますので宜しくお願いしますわ(ゴゴゴゴ!」

『イエス!サー!』

…何故に軍人風?

そして何故にスタンドを出すの?

とりあえず美春は無事の様子で良かった。

…で、次は雄二ユウニかよ。

「坂本雄二だ。まあ呼び捨てにするなり好きな呼び名で呼んでくれ」

「ゴリラー（シユカツ！パシツ！ビユン！）マーン！」

「うお！？何するんだ明久！？それとゴリラーマン言うな！」

「そつちこそいきなりカッター投げる何て危ないじゃないか。僕は好きな呼び名でと言われたからそう呼んだだけだよ？」

「…お前の場合わざとだろ」

「さて何の事かな？ね、美波、美春、瑞希？」

「そうよ。坂本は勘ぐりすぎよ」

「そうですね。むしろゴリラーマン何てお兄様は甘すぎますわ、ブービーマンで十分ですわ」

「そうですね。坂本君は少し冷静になるべきですよ？」

「こ…このリア充…！」

「坂本落ち着け。明久もわざわざ挑発するな」

「…分かりました」

「すみません、師匠」

師匠の諫めも入って僕達は席に着く。

全く雄二は酷いな、好きな呼び名で呼ぼうとしたらカッターは投げるし確信犯だと決め付けるし、拳げ句にリア充呼ばわりとか…

その後は滞りなく進み、次は瑞希の番だ。

その次は僕か、しっかり考えないとね…

「あ、あの、姫路瑞希です。皆さん宜しくお願いしますね！」

手短に済ませたかったのだろう、簡単な自己紹介だったけれど、彼女がFクラスにいるという事実を級友は見逃さなかった。

「質問いいですか？」

「はい、何でしょうか？」

「何でここにいるんですか？」

…聞き様によつては物凄く失礼だよ、それ。

でもそれも仕方無い事だね。

瑞希は一年の頃から優秀な成績を叩きだしており、常に学年次席の座に就いていた。

Fクラスにいるなんて想像もつかないだろう、普通は。

…僕達は当事者だし、その訳を知っているけど。

「えっと、振り分け試験の最中、高熱を出してしまいました…」

『ああ、なるほど』

瑞希の説明に納得した級友達。

すると何処からともなく、というかそこから言い訳が噴出し出しました。

「そういえば俺も熱（の問題）でFクラスに」

「ああ、化学だろ？あれは難しかったなあ」

「俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力を出し切れなくて」

「黙れ一人っ子」

「前の晩、彼女が寝かせてくれなくて」

「今年一番の大嘘を有難う」

…うん、これは相当バカだね。

そんなバレバレな言い訳してもクラスが変わる訳じゃ無いのに。

「明久、お前が最後だったな。代表何だし、前に出てくれ」

「分かりました、師匠」

そう考えていると、師匠に教壇に上がる様促された。
無論それに従う。

さあ、これから僕達の戦いが始まると言っても過言じゃない、気を引き締めていかないとね。

「Fクラスの代表の吉井明久です。気軽に『ダーリン』と呼んでね
！」

「『ダーリン(照)』」

『ダーリーリイーン！』

「…ごめん、やっぱり普通に『代表』で」

うえ、ミスった…

つかみが大事だろうと踏んでの挨拶だったけど、自爆しては意味無いよね…

と、とにかくこれから挽回しないと！

「ところで皆に一つ聞きたいことがあるんだ」

そういいながら一呼吸置きつつ、この教室の設備に目を向ける。

蜘蛛の巣が張った天井

隙間風が入り込む壁

ヒビ割れ、チョークすら無い黒板

足の折れた卓袱台

綿が殆ど入っていない座布団

そしてささくれ立ち、腐った畳

「Aクラスは冷暖房完備な上に座席はリクライニング、机はシステムデスク…他にも色々あるけど、」

そして、切り出した。

「どう思う？皆？」

『ふざけんなああああああああああ！』

即座に学校側に対する不満をぶちまけた級友達。

それはそうだよ、この設備に不満を持たない人がいたら会ってみたいよ。

「だよ、僕も代表として、現状を憂いているよ」

「そうだそうだ！」

「いくら学費が安いからってあんまりだ！改善を要求する！」

「そもそもAクラスだって同じ学費だろ！？あまりに差があり過ぎる！」

皆、考えてる事は一緒って訳だね。

よし、ここで宣言しますか。

「皆の意見は最もだよ。そこでだけだよ、」

ここで一呼吸置きつつ、級友達を見回る。

「僕達Fクラスは、直ぐにでも試験召喚戦争を起こすべきだ」

そして、そう宣言した。

第四章 彼女と彼女(?)と勝ち目その一(前書き)

問

以下の空欄を埋めなさい。

『光は波であつて、「」である』

姫路瑞希、清水美春の答え

『粒子』

教師のコメント

よくできました。

土屋康太の答え

『寄せては返すもの』

教師のコメント

君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。

島田美波の答え

『熱』

教師のコメント

確かに太陽光は暖かいですね。

木下秀吉の答え

『導く者』

教師のコメント

何となく納得してしまう解答ですね。

吉井明久の答え

『約束された勝利』

教師のコメント

F a t e ですか？

第四章 彼女と彼女(?)と勝ち目その一

「戦争を起こすと言っても、何処にだよ?」

「最終的な目標としては、Aクラスを考えてるよ」

『え、Aだと!?!』

「勝てる訳が無い」

「これ以上設備を落とされる何て嫌だ」

「姫路さんがいてくれれば何もいらぬ」

「島田さんに足蹴にされたい」

「秀吉大好きだ」

僕の所信表明、その最終的な目標を告げた途端、否定的な意見と誰かな、僕の彼女に告白紛いな事を言い放ってる奴は?

とにかく色んな発言が渦巻くFクラスの教室。

まあ、それも仕方無い事だよね。

ここ文月学園では、他の学校には無いシステムが採用されている。その一つが『試験召喚獣』であり、それを用いた『試験召喚戦争』。試験召喚獣というのは、科学とオカルトの融合の末に偶然誕生した、呼んで字の如く自らを模した人工生命体を呼び出せるシステムらしい。

その身体能力は、腕力で言えばたった数点でもゴリラのそれに匹敵し、それもテストの点数に比例するという代物だ(ただし現実世界に自由には干渉出来ない)。

そして、その試験召喚獣を用いてクラス対抗で行うのが、試験召喚戦争。

細やかな規則は多々あれど、勝利条件は相手クラスの代表を倒す事と単純明快だ。

そして勝った方が格下ならば相手のクラスと設備を交換出来る。
その代わり格下のクラスが敗北すると設備のランクが一つ下がって
しまうというリスクがある。

只でさえFクラスは試験召喚獣の強さ（イコール学力）が最低クラ
ス、そんな奴らが学年最高の学力を持つAクラスに挑むなんて、一
見して正気の沙汰とは言えない。

だが僕は知っている。

これが決して不可能では無い、という事を。

「皆がそういうのも無理は無い事だよ。一見して無謀だと言うこと
も百の承知さ。だけど僕は、勝ち目の無い戦いに挑む何て馬鹿な真
似はしないよ。こんな提案をしたのも、その勝ち目があつてこそだ」
僕の発言に驚いたのか、初めは騒ぎだしたけれど直ぐに鎮静化する。
その勝ち目は一体何なのか、早く教えろと言わんばかりに。
それを見計らつて、

「その勝ち目と言える存在を今から紹介するよ」

切り出した…それにしても…

「…ムツツリーニ？何時まで瑞希と美波と美春のスカートの中を覗
いてるのかな？」

「……！（ブンブン）」

「は、はわっ」

「な！？つ、土屋！？」

「何やらかしてるんですかこの豚野郎…！（怒）」

少しの怒気を込めて言葉を発しながら目を向けると、そこには先程の美波のカミングアウトで血の海に沈んでいた筈のムッツリーニが畳に顔をくっつけさせて僕の彼女のスカートを覗いていた。僕の言葉を必死に否定するムッツリーニ。相変わらずと言うべきか何というか…

「ムッツリーニの頭の中がエロで満たされてるのは知ってるから、一先ず前に来なよ」

「……！（ブンブン）」

いやだからバレバレだって。

顔に付いた畳の跡（必死に隠してる）とかその他色々…

「彼は土屋康太。ムッツリーニと言えば分かるかな？」

「……！（ブンブン）」

僕の紹介に、場はざわめき出し、ムッツリーニは相変わらず否定した。

「ムッツリーニだと…！？」

「馬鹿な…奴がそうだと言うのか…！？」

「だが見ろ、覗きの証拠を必死に隠そうとしてるぞ…」

「ああ、ムッツリに恥じない姿だ…」

ムッツリーニ、またの名を『寡黙なる性識者』。

そのエロに掛ける思いと情報網、数々の（そっち関係の）技能から、第二次世界大戦当時の枢軸国の一つであるイタリアの首脳ムツソリーニをもじって付けられた、文月学園の生ける伝説。

ただどその正体が彼だと言う事は意外と知られていない。

まあムッツリー二の性格を考えればそれも当然だし、それ故の伝説だけだね。

彼を挙げたのは他でも無い、その情報網と保健体育の学力だ。

ムッツリー二はその性格故か、性に関する知識だけは豊富である。その為に保健体育だけは点数が図抜けて高く、学年首位どころか保健体育の担任である大島先生にすら迫る程だ。

そしてその点数の高さから『アビリティ』も一つ取得している。

アビリティと言うのは試験召喚獣の特殊能力の一つで、各科目で400点以上（総合科目Aは5200点、総合科目Bは7200点）取れば使えるようになり、それを示す腕輪が召喚獣に装着される。その能力の凄さは正に『必殺技』、これ一つで形勢逆転もそんなに難しくも無い。

またアビリティは一つだけという訳では無く、各教科（国語、数学、社会、理科、外国語、健康医学、思想、芸術、総合の九つ）にカテゴライズされた科目のうち一つでも条件を満たせば新たに取得出来る。

閑話休題。

情報網の広さは戦争ではこの上ない武器といっても過言では無いし、科目さえ合えば形勢を優位にするのも容易、という訳だ。

僕がムッツリー二を、勝利に向けてのキーマンに挙げたのはそんな訳がある。

だがそれだけが勝ち目では無い。

「瑞希の事は説明するまでも無いよね？皆もその学力は知ってる筈
ね」

「わ、私ですか？」

「うん、僕達の切り札と言って良いね。期待してるからね、瑞希」
「はい！明久君！」

瑞希が常に、この学年の次席クラスの成績を叩きだしてきた事は皆に知られている。

特に数学は500点近くを叩き出し、唯一『苦手』だと言っていた物理も300点は常に超えている。

その他も400点台中盤、それ故にアビリティも九つ（個人で取得出来る最大数）取得している等、正に僕達の切り札だ。

「そつだ、俺達には姫路さんがいるんだつた」

「彼女ならAクラスにも引けを取らないな」

「ああ、彼女さえいれば何もいららないな」

…ところで誰かな、さっきから人の彼女に告白みたいな台詞を吐いてるのは？

見付け次第マミるよ。

「美春もいる」

「はい、お兄様」

「瑞希程じゃ無いけど、彼女も歴史と倫理と家庭科はAクラス並、さらには他の科目もDクラス、総合ではCクラス並と、Fクラスの第二の切り札と言っても過言じゃないね」

『な、何だつてええええ！？』

「切り札は姫路さんだけじゃ無かったのか！」

「羨まし…ゲフンゲフン、今年のFは予想外だ！」

流石に瑞希と比べると力不足な感は否めないし、アビリティも取得

していないけど、美春もFクラスの中では切り札級だ。

そんな想定してなかった新たな巨大戦力に沸くFクラスの教室…それにしても、何か聞き捨てならないフレーズが聞こえてきたような？その熱気に美春は渋い表情をしながらも、

「非力ながらお兄様達の為に全力を尽くしますわ」

そんな嬉しい事を言ってくれた。

ありがとう、美春！

「まだ終わらないよ。美波もいる」

「え、ウチ？」

「美波もまた歴史と倫理と家庭科はAクラス、さらに数学もAクラス並で、この前のクラス振り分け試験では僕に次ぐクラス二位を叩きだしたんだ」

『おお…』

それでも流石にFクラス所属は実力による物、瑞希や美春と比べれば穴は圧倒的に多い（科目が古典になったら目もあてられない）けど、教科さえ合えば美春同様Aクラスにも太刀打ち出来る。

けれどまだまだ、他にもキーマンはいる。

「秀吉も忘れちゃいけないね」

「む、ワシかの？」

「演劇部のホープか！」

「あれ、確か秀吉の姉って…」

「Aクラスの木下優子じゃなかったか？」

秀吉は学力の面ではそれ程有名じゃない（Fクラス所属なのも美波

と同じく実力による物だし」けど、演劇部では数々の劇の主役として活躍したり、双子のお姉さんである木下優子さんがAクラスでも指折りの秀才である等で、名が知られている。ただそれだけで、僕が秀吉を推薦すると思うかい、皆？

「それだけじゃない、秀吉もまた歴史と倫理と家庭科はAクラス並、他にも国語や古典、音楽や美術がDクラス並なんだ」

『な、何iiiiiiii!?!』

「それ程でも無いぞい。これも全て明久の指導の賜物じゃ」

何言ってるんだい秀吉、僕は歴史と倫理と家庭科を教えただけさ。それ以外の科目は秀吉の頑張りが成せた物だよ。

「ついでに雄二もいる」

「明久てめえ！俺はついでか!?!」

「坂本ってそんなに有名なのか?」

「ほら、あの『悪鬼羅刹』」

「だからついでで紹介したのか」

「いや、坂本って確か小学生の頃『神童』って呼ばれてなかったか?」

「って事は振り分け試験の時は姫路さんと同じく体調不良だった訳か」

「実力はAクラスレベルが二人、教科を絞れば六人もいるって事だよな!」

皆、期待するのは勝手だけど、あくまで小学生の頃だからね？

今となつては実力でFクラス所属となつた只のバカだ。

美波みたいに山と谷だらけでも無ければ、ムツツリーニみたいにつだけ突出した分野があるという訳でもない。

でも時折、『神童』と呼ばれていた頃を彷彿とさせる頭の回転の早さを見せる事がある。

最もそれは雄二がやる気になった時限定何だけど。

今回の事で雄二のやる気に火が着くかは分からないが、僕がついでとはいえ推薦したのは、そこに期待を込めてだ。

でもここまでクラスのテンションを上げられるとは予想外だったね。

「それに、代表である僕も全力を尽くすよ」

そして、ここで代表たる僕。

瑞希には及ばないけど、Fクラスの代表として、さつき秀吉が言ったように彼女達の成績（歴史と倫理と家庭科だけ何だけど）を伸ばした身として、腕を振るうつもりだ。
だが、

「あれ…なあ、吉井って…」

僕の名を出した途端、別の意味で騒然となるFクラス。

あれ、何かまずかったかな（汗

「…確か『観察処分者』じゃ無かったか？」

しまった、それがあつたか！

四章 彼女と彼女(?)と勝ち目その一(後書き)

何時の間にか一万PV&二千ユニークアクセスを達成しました！
皆さんの愛読、ありがとうございます！

これからもしばらくは『天才と色ボケと下克上』に専念したい為此
ちらは不定期となりますが、引き続き宜しくお願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5005x/>

ゲーマーと歴史バカと無限神刀流

2011年12月2日00時47分発行